ねぇ、

宵凪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ねぇ、

【Ｎコード】
Ｎ９５７９Ｉ

【作者名】
宵凪

【あらすじ】
私と、彼女の家族相談。

（前書き）

フィクションです。

私、小さい時からお父さんいないんだ。
何故だか分からないけどね、お母さんしかいなかった。
私が生まれたばかりのころは、まだお父さんもいた。写真に映っていた。でも、小さいときのことだから、覚えてない。幼稚園や小学校の時、お父さんがいないことをお母さんに聞いても、何も答えてくれなかった。母方のお婆ちゃんと、三人で暮らしているから、お婆ちゃんに聞いてみても、何も答えてくれなかった。でも、お父さんがいないと言っても、普段の生活で困ることはなかった。でも、ふとした時に、少し思う時があるの。

なんで、私にはお父さんがいないの？

彼女とは、よく学校の帰り道、一緒に帰った。色々な話をしたが、その中で、一番この話が印象に残っている。
今の時代、親が一人しかいないのはそれほど珍しくもないだろう。しかし、時代がそう騙っていても、簡単にその事実を受け入れてもいいのだろうか？私は、まだ幼いながらにそんなことを思った。
事実、私も親は一人だ。母と父の仲が悪く、別居をしている。愛し合い、愛を確かめ合い、できた結晶が私達のはずなのに、何故、その愛の結晶を前に、自分たちの愛を否定する？愛の結晶を否定しているのと同じではないか。私達の存在を、否定しているのと同じではないか。
仲の悪い夫婦を否定している訳ではない。私の親を否定することになるから。だが、何故、暴力を振るう？違う人を愛する？おかし

いではないか。そこに確かに、愛があったからこそ、私達がいるのではないのだろうか。貴方たちも、貴方たちの親が愛し合って出来た子供だと、知っているはずなのに。生憎、私の祖母と祖父は、両方とも仲が良く、良い夫婦だ。

彼女の親が、暴力を振るっていたのかも、違う人を愛していたのかも、私には見当が付かない。彼女も、詳しくは分からないと言う。自分の親がどういう理由で離れ離れなのかを子供が知らないとは、可笑しい話である。

離れる事によって、愛し合った時が忘れられるというのならば、それほど残酷なことはないだろう。

「私さ、お母さんに何回も聞いたよ。何でお父さんいないの？って。でもね、全然答えてくれない。だからさ、まぁ、その時の私はまだ小さかった。自分のせいかもしれない。けどね、見つけた。見つけてはいけなかった物を見つけた。」

彼女は自嘲的な笑みを浮かべた。わざと軽く話そうとしているのが目に見えて分かる。

「小学校三年生くらいの時かな。ほら、好奇心ってあるでしょ？それだよね。お母さんの部屋に入ったんだ。」

その時、直感した。嗚呼、いい結果ではなかったんだな。

いっそう笑みを深めて、困った様に眉を下げながら彼女は明らかにいつもとは違う調子で話した。

「お母さんの部屋のタンスを開けたらね、そこに、写真があったの。お母さんと、男の人と、女の子の写真。その男の人は、私のお父さんじゃなかったし、そこに映っている女の子も私じゃなかった。お母さんにはね、もう一つの家族がいたんだ。」

えっ？思わず、聞き返してしまう。男の人と映っていたのは、まだ分かるが、子供もいたとなると、私には考えられなかった。話を聞けば、その女の子は小学生くらいの大きさ。当時の彼女が小学三年生、ということは、彼女の母親は、彼女が生まれて、最低でも三

年以内に、違う男の子供を身篭ったことになる。衝撃的すぎる。私には考えられない。公共の場だと言うのに、思わず大声で叫んでしまった。

だが、彼女が必死で明るく話そうとしているのに、私が暗くしてしまっては意味がない。と思い、タンス事件だね。と、一言だけ言った。彼女は笑っていた。気の利くことが言えない自分を、ここまで恨んだ事はない。

「すごいショックだったよ〜」

彼女は、誰にも相談出来なかったらしい。一緒に住んでいる祖母は、彼女の母と仲が悪く、いつも喧嘩ばかりしているらしい。そんな祖母に言ったとしても、また母と祖母が喧嘩するだけだろう。彼女は、彼女たちの喧嘩を見ることを嫌がった。

突然だが、今の私達の年齢は中学二年生。

今まで、誰にも相談をせずに悩んでいたと言う。

「それでね、もう一つの家族は、近くに住んでるの」

彼女の家の前には河川敷がある。その河川敷を越え、信号を一つ越えたところに団地がある。もう一つの家族は、その団地に住んでいるらしい。

その事実に、また私は驚く。

それは、彼女の家から近い、ということだけではなく、彼女がその事実をしっていることについてだ。

今までの話を聞く限り、彼女の母がもう一つの家族のことを話すような人ではないことが分かるであろう。ならば、何故？

そんな私の疑問は、直ぐに解決されることになる。

「すごくね、そこのお父さん恐いんだ。」

もう一つの家族に、会ったことがあると彼女は言った。

「家に来たの。それでね、お母さんに向かって、早くこっち来いよって、お母さんを無理矢理もう一つの家に連れていこうとしたの。」

その時は、祖母もいなく、彼女は一人、怯えていたと言う。

曲がりなりにも、彼女の母であり、彼女を守るべき存在であるは

ずの人間が、彼女に危険をもたらすとは。

世の中には、自分で産んだ子供を、自分が腹を痛めて産んだその子供を虐待する母親がいる。どういった気持ちでそのようなことをやるのだろうか。私には、理解ができない。一番近い存在の母親に、自分の存在を否定された子供は、この先どうやって生きていくのだろう。どのような存在意義をもって生きていくのだろう。

「お母さんと喧嘩したんだよね。それで、言われたんだ『お父さんとは離婚したの！』って。」

その時は、まだ離婚したのかどうなのか分からず、ずっと単身赴任だと思っていたらしく、衝撃的だったらしい。

「それで、いつも言われるの。喧嘩するとね、『お父さんの所に電話するよ！』って。私、お母さんよりもお父さんの方が好きだから、お父さんの家に行きたいっていつも言ってる。でも、お母さんはいつも口だけで、何もしてくれない。そういえば最近、お父さんに会ってなかった。小学校六年生の夏休みにお父さんの所に行ったっきり、会ってないな。忙しいから。」

そう言う彼女は、とても悲しそうだった。

一体、何人の子供がこんな思いをしているのだろうか。

親が一人でも、平気な子供も沢山いるだろう。でも、彼女は、平気ではなかった。家では、いつも一人だった。彼女の母親は、頻繁にどこかへ出かける。彼女の祖母は、あまり家にいなかった、和式の、大きな家は、彼女にとっては広すぎた。

そんな彼女の口癖は、いつも決まって「ペット飼いたい」だ。

『ペット』という存在に癒されたいのだろう。しかし彼女の母は動物が嫌いである。彼女の願いは、叶うことがない。

彼女に、寂しくなったらいつでも家においで？そう言ってみても、曖昧に笑うだけ。

「私昨日お母さんと喧嘩したの。でね、『あんたなんていらない！

あっちの家族の方が幾分かマシだわ！』って言われた。もう、本気でお父さんの所に行こうと思った。」

何故、彼女の母親は、彼女の父親と別れたのだろうか。何故、それを彼女に話さないのだろうか。何故、母親という生き物は、一人で全て背負ってしまうのだろうか。

私の母も、最初は、泣いたと言う。子育てが苦しくて、負担で、好きなこともできなくて、泣いたと言う。

人には、とても便利な機能が沢山備わっていると言うのに、何故それを使わないのだろうか。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9579i/

ねぇ、

2010年10月8日15時13分発行